

下り考一アトシ

川越文化を伝承し、次世代に誇りを持ってほしい

「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と唄われるほど、東海道最大の難所だった大井川。川越しのために、さまざまな文化が発展しました。大井川輦台越保存会の会長を務める白井さんは、その文化を次世代に伝えるために活動しています。

【川越文化と共に】

河原町で生まれ育った白井さん。川越文化は、子どもの頃から身近な存在でした。

「戦後、川越しまつりが復活した時は、町民総出で輦台を担いだものでしたよ。この地域で育ったから、そういう文化を残すのが当たり前だと思っていました。だけど、担ぎ手は次第に減少。危機感を抱いた我々は、昭和60年に大井川輦台越保存会を設立しました。その後、河原町だけではなく、他の町内からも有志の人たちに参加してもらって、今は約50人の会員がいます」



【次世代に伝えるために】

残念ながら、大井川での輦台越しは、平成17年を最後に実現していません。保存会の会員の減少や高齢化、資金不足や大井川の流量が減少したことなどが原因です。

地域のイベントや学校の通学合宿で、子どもたちに体験してもらっています。男の子は、フンドシをつけてミニ輦台を担ぐと「重い！」と驚きます。意外と面白がって、みんなやりたがりますよ」



保存会 会長
白井 平さん(河原二丁目)

同じような文化はありません。輦台や肩車の担ぎ方ひとつ取っても、文章や写真だけでは伝わらないことが、たくさんあります。それらが失われないように、今できることをしているんです」

輦台の担ぎ手だけでなく、文化継承の担い手をも失うことが、何よりも寂しいと白井さんは話します。

「ぜひ、皆さんには『自分の古里には、こんなに珍しい文化がある』という誇りを持ってもらいたいですね。近頃は、川越人足が履いていた『権三(ごんさん)わらじ』の復活に取り組んでいるんですよ。今は

「今の子どもたちは、本当に大井川を輦台で渡っているところを見たことがないですよ。昔はそんな文化があったということも、知らない子が多い。だから、少しでも多くの人に知ってもらおうと、



いないので、つじを手掛か研究していても、大井川でないもの。将合向けの体験作物として販ら、大井川と受け継がれて史。白井さんと次世代に受一歩先の未来す。



通学合宿で、輦台越を体験する児童と指導する白井さん(左端)

この位置は少し足りない! Goodなロゴ!

Shimadajin File #88

Story

島田 人